

外国語学習者のメタ言語能力についての考察

森 内 悠佳子

1. はじめに

本稿の目的は、外国語教育における、学習者のメタ言語能力の育成の必要性とその手法について、理論的背景を踏まえて考察することである。

まず始めに、近年、英語教育を中心に着目されている教授法フォーカス・オン・フォーム（Focus on form）について述べる。次に、メタ言語能力を定義し、その関連領域を概括する。そして、外国語教育と日本の国語教育を通じたメタ言語能力の発達と育成についてまとめ、複言語教育におけるその可能性について考える。最後に、メタ言語能力の育成に焦点を当てた教室内の活動として、書く活動と作文へのフィードバックの在り方について考案する。

2. フォーカス・オン・フォームによる指導法

昨今、外国語教育の目的をコミュニケーション能力の育成とし、母語の使用をできる限り排除するような傾向がある。平成25年度より施行されている高校の外国語の新学習指導要領には、「授業は英語で行うことを基本とする」(P6)とある。その目的は、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため」(P6)である。この取り組みは一見したところ、1980年代から普及したコミュニカティブ・アプローチの流れによる **Focus on meaning** を連想させる。これは、目標言語による意志の伝達、意味の理解を重視した指導法である。言語形式を一切無視した意味偏重のこの方法では、文法的正確性を身に付けることができない。また、学習者は明示的な文法記述に頼ることができず、自律学習ができない。さらに、詳細な文法知識や読解力、和訳を問われる大学受験を控える高等学校では、**Focus on meaning** に頼るわけにはいかない。実際、新学習指導要領は、効果的な日本語の使用を認めている上、文法の指導をしないことを意図しているわけではない。しかしながら現場は、所謂「オール・イングリッシュ」と捉えがちであり、受験指導との兼ね合いを考え、困惑しているのではないだろうか。一方、文法

などの形式のみに注意を払い、機械的な反復を通して外国語を身に付ける **Focus on forms** では、学習者の発話能力を育成しない。文法は良く知っているが、話せない、書けない学習者がこの結果である。日本の外国語教育では、この指導法が教室に根強く残っていることも否定できない。

こうした中、近年英語教育を中心に注目を集めているのが、Long(1991)の提唱する **Focus on form** (フォーカス・オン・フォーム) である。これは意味中心の言語理解・産出活動において特定の言語形式(語彙・文法)への気づきも促す方法である。Schmidt(1990)は、言語形式に対する「気づき」(noticing)は第二言語習得において重要な認知プロセスであるとしている。ここ数年では、この **Focus on form** に特化した著作や研究も充実しつつある。村野井(2006)は、言語運用の面で「つまずく」ことによって、学習者の注意は言語形式に向けられるとし、このつまずきに教師が気づいて助けたり、学習者自身が誰かに尋ねたり、文法書を見るなど助けを求めれば、それが一種の **Focus on form** となると述べている。他にも様々な方策があるが、**Focus on form** による指導を可能にする要素の一つは、学習者の誤用の扱いであると言える。

3. メタ言語能力の定義と領域

Focus on form により言語形式に注意を払わせる指導法が再評価されたことで、学習者のメタ言語能力への関心が高まった。メタ言語能力についての研究は、既に1970年代から、ヨーロッパとアメリカを中心に盛んであった。母語教育に関してだけでなく、特にバイリンガリズムとの関係において研究されることが多く、言語能力や象徴機能の発達、読み書きの能力には欠かせない(Mora, 2008)。生越(2006)は、メタ言語能力を「言語を客体として意識・観察・運用する力」(P61)と定義する。これと類似した概念を示すものとして、「メタ言語意識 (metalinguistic awareness)」(Tunmer & al, 1984)、「言語についての知識 (knowledge about language)」(Carter, 1990)、「メタ言語知識 (metalinguistic knowledge)」(Jessner, 2008)などが挙げられる。第二言語習得における認知的アプローチの見地からは、前述の「気づき (noticing)」や、「注意 (attention)」(Schmidt, 2001)、「意識高揚 (consciousness raising)」(Rutherford & Sharwood Smith, 1985) などとも重なる部分が多い。

Bialystok(2001)は、メタ言語知識 (metalinguistic knowledge)、メタ言語能力 (metalinguistic ability)、メタ言語意識 (awareness) の3つを明確に区別している。メタ言語知識を「言語や言語の機能についての抽象的な知識」、メタ言語能力を「その知識を個人が言語データを処理するために使用する能力」

とする。そして、「ある言語データに注意を向け、そのデータと関連する知識を呼び起こす能力」がメタ言語意識であり、これは「注意 (attention)」の概念と重なる。これらの3つの概念は、フランス語圏の研究においては、それぞれ「connaissances métalinguistiques」, 「capacités métalinguistiques」, 「conscience métalinguistique」と訳される (Candelier, 2003)。しかしながら、Huot & Schmidt(1996)が指摘するように、英語圏とフランス語圏の研究間の用語の訳の問題や、同一言語内でも類似した概念を指す用語の統制がとれていないという問題がある。日本における学習者のメタ言語能力に関する研究については、母語教育や英語教育、日本語教育の分野での言及が目立つ。しかし、フランス語教育に関しては、メタ言語能力に関する研究が極端に少ない。その理由の一つは、このような用語の不透明性にあるのではないだろうか。

本稿では、生越 (2006) の定義に基づき、メタ言語能力をその他のメタ言語意識やメタ言語知識と区分することなく、言語を客体化し、その形式や構造などの特性に気づくことと、そこから得た知識を運用する能力の両者を含むものとする。

メタ言語能力の及ぶ領域は、言語のあらゆる側面と構成要素である (Mora, 2008)。岡田 (1998) は、音韻、形態、統語、意味、語用に関わるとしている。例えば、音素の結合の理解や、語の内部構造や語順の理解、非文の認識力や訂正する能力である。また、主語・述語などの機能を認識する力や、文を品詞に分けて構造的に認識する力を指す。単語の意味についての気づきや、言語とその使用状況に対する気づきもこれに当たる。大津 (1989) はさらに、メタ言語能力は、談話法的側面 (文連結、文章) にも及ぶと指摘している。

4. メタ言語能力の発達

4-1. 母語教育におけるメタ言語能力の育成

母語に対するメタ言語能力は、子どものことばの発達のかなり早い段階から確認される。その例として大津 (1989) は、2歳児が「雨」と「鉛」のアクセントの位置の違いを理解し、間違ったアクセントで発音されたものをコンテクストに合わないこと示したことを挙げている。個人差があるにせよ、こうしたメタ言語能力は、一般的に年齢があがるにつれて発達する。また、外界からの適切な働きかけが行われるとその発達が促進されると考えられている (大津, 1989)。教育的観点から考えれば、メタ言語能力の発達を働きかけることは、言語の構造や機能の理解、言語への意識・関心を高めることになる。つまり、母語教育においてはもちろんのこと、外国語教育においても、メタ言語能力の

発達を教育の目的の一つとするべきである。実際、日本の国語教育では、子どもたちの言語感覚を育てることを目標としていることが、現行の国語科の学習指導要領からわかる。以下のような記述がある。

小学校の目標：

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」(P12)

中学校の目標：

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」(P12)

高校の目標：

「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」(P8)
(下線は筆者による)

紙面の関係で、すべての引用は割愛するが、各段階で学習すべき国語の特質に関する事項として、小学校、中学校、高校ではそれぞれ具体的に、以下の内容を挙げている。

小学校：「音節と文字との関係や、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くこと」「文の中における主語と述語との関係に注意すること」「修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと」「指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うこと」「文章の中での語句と語句との関係を理解すること」「文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること」「比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと」(P30)

中学校：「単語の類別について理解し、指示語や接続詞及びこれらと同じような働きをもつ語句などに注意すること」「抽象的な概念を表す語句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き語彙を豊かにすること」「文の中の文の成分の順序や照応、文の構成などについて考えること」「単語の活用に

について理解し、助詞や助動詞などの働きに注意すること」「相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解すること」(P32)

高 校：「国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などを理解すること」「文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすること」(PP28-29)

このようにして、初中等教育を通して、表現力や思考力の育成を強調する傍ら、一貫して文の構造や成分、言語感覚などのメタ言語能力を養うことを目標としている。しかしながら、実際に教室でどのように指導されているかは、教師によるところがあるのかもしれない。教育現場では、子どもたちの国語力が危惧されていることは否定できず、それは筆者が外国語教育に携わっていても、同様に感じることである。例えば、基本的な品詞の概念や機能を理解していないことが多い。Cummins (1991) は、第一言語と第二言語の間には共通基底言語能力 (Common Underlying Proficiency) が存在し、依存関係にあるとしている。つまり、外国語の習得には、母語の能力が作用するということである。母語の運用能力の基礎となるのは、このメタ言語能力である。小学校での教科としての英語教育の導入や、国際化に伴う複数の外国語の習得の必要性から、今後は国語教育において、いかにしてメタ言語能力を育成するかを考えていくことが課題なのではないだろうか。

4-2. 外国語教育とメタ言語能力

外国語教育に関しても、母語教育と同様のことが言える。岡田 (2005) は、英語のメタ言語能力を獲得したおかげで英語の運用能力が高まったという経験をもっている人が多いと述べている。実際、漢字という表意文字を中心とする日本語を母語とする学習者が、フランス語の音素の結合に関する明示的な知識を身に付けると、単語の発音ができるようになり、覚えやすくなるものである。日本で外国語を学ぶ場合、特に義務教育など公的な教育機関では、母語の学習環境とは異なり、教室は当該言語を学ぶことを目的とした人工的な空間である。つまり、本来言語そのものを客体化しやすい環境であり、学習者のメタ言語能力の育成に適している。しかしながら、前述の通り **Focus on meaning** や **Focus on forms** に偏向した教室活動を中心とし、適切な働きかけがなければ、言語の運用能力と並行してこの力を身に付けさせることは、あまり期待できない。

どの言語にも共通のメタ言語能力がある。例えば、品詞の概念や、主語、述語などの文の要素を理解し、読解や作文などの言語運用に活用することである。母語の獲得と共にこのメタ言語能力も発達するが、外国語に接することによりさらに意識化が促進すると言われている（竹井他, 2009）。その理由は、2つの言語を比較対照することで相違点や類似点が明らかになり、言語の特性に気づきやすくなることにある。外国語学習を通して、メタ言語能力を育てるという観点から、大津（1989）や生越（2006）は、国語教育と外国語（この場合は英語）教育の連携に、可能な限り取り組むべきであると提案している。メタ言語能力の育成は、認知的に発達段階にある年齢的に若い学習者ならば、なおさら必要となる。教育機関の状況が許せば、中等教育の段階で、言語横断的にこの能力を伸ばすためのカリキュラムを作成することもできるのではないだろうか。

4-3. 複言語教育におけるメタ言語能力育成の可能性

筆者の考える言語横断的なメタ言語能力の効果的な育成方法は、第二外国語と第三外国語の学習を利用することである。著者の場合は、英語とフランス語を意味する。複数の外国語を学習することで、より容易に学習者のメタ言語能力を育成することができる。実際、ヨーロッパ言語共通参照（Conseil de l'Europe, 2001）には、意識を高めること（*prise de conscience*）について以下のような記述がある。

「複言語と複文化の能力を持つことで、言語とコミュニケーションに対する意識も高まる。また、メタ認知的な方略も発達し、社会の一員として課題、特に言語面での課題に「自発的」に対処する方法について意識が高まって、その対処方法もコントロールできるようになる。さらに、こうした複言語と複文化の経験は、

- ・すでに持っている社会言語能力・言語運用能力を伸ばし、それがまた複言語と複文化の能力を伸ばす。
- ・さまざまな言語の言語構造について、その共通性と独自性を認識する力を向上させる（一種のメタ言語的・言語間的認識、いわゆる「超言語的」認識）。」（P148）

このように、客体化して捉えやすい母語以外の2つ以上の外国語を学習すれば、それらを比較対照することが可能になり、メタ言語能力が発達しやすくなる可

能性は高い。大津（1989）によれば、Tunmer & Myhill（1984）も、単一言語使用者に比べて、二言語・多言語使用者のメタ言語能力の発達が一般に早く、その内容も豊富であることが多いと報告している。言語間の類似点や相違点に気づかせることで、一般的なメタ言語能力を身に付け、また片方の言語の習得を通して得たメタ言語知識を、もう一方の言語の習得にも活かすことが期待できるのである。

5. 教室におけるメタ言語能力の育成を目指して

筆者の携わるフランス語学習者は、英語も並行して学習している。日本において、英語以外の言語を教える場合は、そういった学習者を対象とすることがほとんどである。既に述べたように、複言語教育が学習者のメタ言語能力育成に適した環境であるとすれば、いかにして教室で適切な働きをするかが効果を左右することになる。

Focus on form の手法を用いた研究では、オーラル活動を通して言語形式や機能に気づかせ、メタ言語能力を育てようとする試みが多い。しかし筆者は、書く活動におけるメタ言語能力の育成に着目している。書く活動では、産出したものへ学習者の注意が向きやすく、そのための時間的猶予もある。また、フランス語は話し言葉と書き言葉が大きく異なり、例えば、発音されない文法的形態素などの言語形式を、学習の早い段階から意識させる必要がある。書く活動は、これに適していると言える。

また、書く活動を活かして言語形式への気づきを促す方法として、作文へのフィードバックがある。教師が学習者の誤りすべてを修正したところで、学習者はそれほど注意を払っていない。岡田（2005）の述べるように、メタ言語的フィードバックは文法的正確性に近づく一つの有効な手段であるのかもしれない。しかしながら前述の通り、学習者の誤りを上手く活用して、学習者の注意を意味から言語形式に移行させれば、Focus on form の効果が期待でき、メタ言語能力の育成ができる。その一つの手法は、教師による暗示的な誤用訂正から、学習者の主体的な訂正を促すことである。これは、自律学習にも繋がり、繰り返せば自己訂正の力もつく。こうした作業は、結果として言語運用能力の向上にも有意義である。今後の課題は、こうした取り組みの効果を検証することである。

（埼玉県立伊奈学園総合高等学校）

参考文献：

- BIALYSTOK, E. (2001) *Bilingualism in development: Language, Literacy and Cognition*, New York, Cambridge University Press
- CANDELIER, M. (2003), *Evlang – l'éveil aux langues à l'école primaire – Bilan d'une innovation européenne*, Bruxelles, De Boek-Duculot.
- CARTER, R. (ed.) (1990) *Knowledge about Language and the Curriculum, The LINC Reader*, London, Hodder & Stoughton
- CONSEIL DE L'EUROPE (2001) *Cadre européen commun de référence pour les langues*, Paris, Didier (吉島茂／大橋理枝 訳・編 (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)
- CUMMINS, J. (1991) Interdependence of first- and second-language proficiency in bilingual children. In BIALYSTOK, E (Ed.), *Language Processing in bilingual children*, pp.70-89, New York, Cambridge University Press.
- HUOT, D. and SCHMIDT, R. (1996) « Conscience et activité métalinguistique. Quelques points de rencontre », *Acquisition et interaction en langue étrangère*, n° 8, pp.89-127
- JESSNER, U. (2008) A DST model of multilingualism and the role of metalinguistic awareness, *The Modern Language Journal*, 92, pp.270-283
- LONG, M.H. (1991) Focus on form: A Design Feature in Language Teaching Methodology, In DE BOT, K. and HUEBNER, T (eds.), *Foreign language research in cross-cultural perspective*, pp.39-52, Amsterdam, John Benjamins
- MORA, J.K. (2008) Metalinguistic awareness as defined through research. CLAD Website Resources (<http://coe.sdsu.edu/people/jmora/MoraModules/MetaLingResearch.htm>).
- RUTHERFORD, W and SHARWOOD SMITH, M. (1985). Consciousness-raising and universal grammar, *Applied Linguistics* 6 (2), pp.274-282
- SCHMIDT, R. (1990) The Role of Consciousness in Second Language Learning, *Applied Linguistics*, Vol.11, No.2, pp.129-158, New York, Oxford University Press
- SCHMIDT, R. (2001) Attention, In ROBINSON, P (ed.), *Cognition and second language instruction*, pp.3-32, New York, Cambridge University Press
- TUNMER, W.E. and MYHILL, M.E. (1984) Metalinguistic awareness and bilingualism, In Tunmer et al. (eds.), pp.169-182
- TUNMER, W.E., PRATT, C. and HERRIMAN, M.L. (eds.) (1984) *Metalinguistic Awareness in Children: theory, research, and implication*, Berlin, Springer-Verlag
- 大津由紀雄 (1989) 「メタ言語能力の発達と言語教育－言語心理学からみたことばの教育」『言語』18(10), pp.26-34, 大修館書店

- 岡田伸夫（1998）「言語理論と言語教育」大津由紀雄（他）『岩波講座 言語の科学』第11巻, pp.130-178, 岩波書店
- 生越秀子（2006）「初等言語教育におけるメタ言語能力開発についての一考察—国語教育と英語教育の連携を期して—」『青山国際コミュニケーション研究』第10号, pp.61-91
- 竹井光子、吉田悦子、藤原美保（2009）「談話レベルのメタ言語能力育成のためのコンパラブルコーバスの構築と活用」『言語処理学会第15回年次大会発表論文集』pp.626-629
- 村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂
- 文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社

